

「けんちゃん汁、余ってるんやけど食べる。」
由良明子(30)が、2階から大きな声で呼び掛けた。
「助かるわ。ありがとぅ、アッコちゃん」

1階のリビングでインスタントラーメンをすすっていた井上孝史(28)が答える。「はい、どうぞ」。けんちゃん汁の鍋を持ってきたのは、明子と同じ部屋に住む大村太一(30)。これで、孝史の夕食がちょっと豪華になりそうだ。

この家は神戸市垂水区の閑静な住宅地にある。築50年ほどの大きな3階建て。見た目はごく普通の民家だが、孝史ら20代後半の单身男性3人、太一・明子の独身男性3人、と子ども4人家族の計9人が住む。庭で飼う愛犬「あらびき」も加え、他人同士が一つ屋根の下で暮らす「シェアハウス」だ。

もとは孝史が育ち、母親や祖父祖母らと暮らした自宅。祖父が他界し、祖母や母が長期入院したのを機に、2年半前「和楽居」と名付けてシェアハウスにした。孝史は住人でもあり、オーナーでもある。

「ちょっとだけ声、小さくしようか」。別の夜、20畳はある共用リビングで、住人が寄せ鍋を囲んだ。酒も入り次第に大きくなる話し声に、考

つながる場所

①シェアハウス

史がやんわりと口を挟む。リビングの隣室では、瀬川悠美子(29)が、夫の映太(28)の帰りを待ちつつ、長女理菜(2)と次女天乃(8カ月)を寝かしつけている。鍋のメンバーは「あ、そうやった」と目を合わせてうなずいた。
居住スペースや車、時には食事もシェアする(分け合う)暮らし方は、約束事や制約が多い反面、住居費や生活費の負担が軽くて済む。
「1人暮らしを続けること

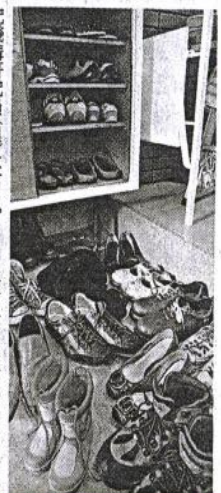


①「結構、楽しく暮らしています」。愛犬を抱くオーナーの井上孝史さんを中心に、全員で記念写真に納まるシェアハウス「和楽居」の住人たち
②③この家にはたくさんの友人たちも集まる。玄関には靴があふれる
④⑤「分け合う」暮らしのために、居住空間だけでなく、共用の食器も用意されている＝いずれも神戸市垂水区(撮影・山崎 竜)

他人と暮らすという選択

が経済的に苦しい時代。雇用不安定な中、他人と暮らすという選択肢は当たり前。・ひょうご震災記念21世紀研

究機構研究員(34)は言う。和楽居の家賃は月3万5千〜6万円。こうしたシェアハウスは、数年前から神戸・阪神間でも増えつつある。
和楽居の住人たちは1980年前後に生まれ、バブル経済後の「失われた10年」「格差社会」と呼ばれる時代に社会へ出た。彼らも激しい競争にさらされ、正規社員は2人しかない。しかし和楽居に居続ける理由は、経済負担の軽さだけではない。
「ただいま」「お帰りの。鍋の後片付けが始まったところ、太一が帰ってきた。こんな夕飯にね、「ただいま」って言う場所があるっていうのがいいんです」
彼らがつながっているそんな場所は、正社員というレールにうまく乗れなかった孝史の挫折から生まれたものだった。(敬称略)



バブル後世代の幸福論

高度成長期	(年)
	1980
	1981 ポートピア'81開催
	1982
	1983 東京ディズニーランド開園
	1984 グリコ・森永事件
	1985 プラザ合意 男女雇用機会均等法成立
バブル経済期	1986
	1987
	1988
	1989 平成元年 消費税導入
	1990
	1991 バブル崩壊
	1992
	1993 細川連立政権発足
失われた10年	1994 「就職氷河期」が流行語に
	1995 阪神・淡路大震災
	1996
	1997
	1998
	1999 労働者派遣の原則自由化
	2000
	2001 小泉政権発足 構造改革始まる
	2002 戦後最長の景気拡大 (~07年)
	2003
	2004 製造現場への派遣解禁
格差社会	2005
	2006 ライブドア事件 「格差社会」が流行語に
	2007
	2008 リーマン・ショック
	2009 民主党政権発足
	2010 秋時点の大学生の内定率が過去最低に
	2011